

平成24年度 「社会を明るくする運動」

標語及び作文入選作品の紹介

出雲地区保護司会では「犯罪のない明るい街づくり」「青少年の非行防止」をアピールする標語を、一般の部、小・中学生の部（出雲市青少年育成市民会議との共催）として募集しました。

標語一般の部には137点、小・中学生の部には小学生986点、中学生229点の応募がありました。

また、島根県社会を明るくする運動推進委員会が行った作文コンテストに協力し、小・中学校に参加を呼びかけたところ、小学生から183点、中学生から32点の応募がありました。

当保護司会で慎重に審査した結果、次のとおり決定しました。たくさんの応募をありがとうございました。

一般の部

最優秀賞

勇気ある

君の態度が 友救う

湖陵町 春日ノブ子

優秀賞

やり直す

気持ちによりそう 地域の輪

大津町 石橋 律子

叱るより

生かそう子供の よいところを

平田町 磯崎 又司

非行の子

なくす社会は 家庭から

神西沖町 今岡 忠輔

アイサツは

非行防止の 第一歩

大津町 矢野 勲

非行の芽

地域の絆で 摘みとろう

高岡町 成相 匠平

佳作

子が学ぶ

家庭でありたい 基礎づくり

小伊津町 土江 桂子

ためらわず

一声掛けて 手をかして

大社町 伊野木 正

読み取ろう

あの子の悩み 愛の目で

天神町 加藤 早苗

見過ごすな

いじめと遊び 紙一重

武志町 築森 寛喜

勇気もて

知らない振りが はずかしい

大社町 林 宏

もうやめて

いじめ悪口 いやがらせ

平田町 磯崎 明美

地域の輪

広げて守る こどものいのち

湖陵町 園山 京子

『非行^{ゼロ}』

神話の里の 道しるべ

天神町 高橋 弘吉

見過ごすな

街の片隅 非行の芽

湖陵町 打田 薫

あいさつは

みんなにくばる 宝物

芦渡町 有田 治夫

小学生の部

最優秀賞

やさしさも

まいごちかばごご つめんだぞ

国富小学校 一年 中島 隆輔

優秀賞

あいさつが

きずなをつなぐ だいっほ

大津小学校 二年 福島 叶優

いわないよ

自分が言われて いやなこと

東小学校 五年 田中 翼

優良賞

あいさつで

ひろがるえがおの 町づくり

灘分小学校 二年 渡部 翔太

わたしたち

みんながうよ そこがいい

東小学校 二年 福田 真子

見のがすな

いじめのサインは きつとある

大津小学校 二年 小村 悠人

たいせつな

はなしをきいてよ

おかあさん

高松小学校 一年 高瀬 俊輝

友達は だれもが持てる 宝物

荒木小学校 六年 妹尾 優花

とっげごう

やさしいえがおが

みまもってるよ

灘分小学校 一年 梅木 真心

明日じゃなくて

今からやろう エコ活動

莊原小学校 六年 福島 篤

あいさつは

元気な心の 宅配便

長浜小学校 四年 中尾 香達

「ありがとう」

心をつなぐ 合言葉

大津小学校 六年 松浦 琴音

悪ふざけ

それよりみんなで ほめあおう

長浜小学校 六年 澤江 千裕

中学生の部

最優秀賞

辛いなら

抱え込まずに 話してね

佐田中学校 三年 板垣 未貴

優秀賞

第一歩

いじめをとめる その勇氣

第二中学校 一年 田中 弘樹

守ろうよ

小さな命の 大きな未来

佐田中学校 三年 安喰 実桜

優良賞

ポイ捨ては

心も町も よごれるよ

第三中学校 三年 門脇 明穂

ごめんねと

言える勇氣で 笑顔が増える

多伎中学校 三年 石飛 真帆

今の自分

みんながいたらから あるんだよ

斐川東中学校 三年 石原 幹太

つらいけど

私とあなたで 半分

斐川東中学校 三年 百合本香衣

お帰りの

その一言で つながれる

湖陵中学校 三年 杉原 唯那

あいさつは

地域とつながる 第一歩

湖陵中学校 三年 春日麻由美

「がんばれ」と

君に言われて 元気出た

斐川東中学校 二年 曾田由莉奈

大丈夫?

これが僕らの 合い言葉

斐川東中学校 二年 玉木 圭祐

つくりたい

笑顔あふれる 明るい町を

第三中学校 三年 鎌田 諒平

心から

素直に言えます

「ありがとう」

多伎中学校 一年 安井菜々子

「社会を
明るく
する運動」

作文コンテスト優秀作品

ボランティアをすることの意味

出雲市立斐川西中学校 二年 野津直子

ボランティア、という言葉が聞いたら、どんなボランティアが思い浮かぶでしょうか。ボランティアには、海外へ行って活動するものもあれば、地域や学校という、自分の身の周りのボランティアもあります。

もともとボランティアなどに興味がなかった私ですが、父が東日本大震災の復興支援のボランティアをやっているのを見て、私もボランティアをするようになりました。

昨年の長期休業中から、学校周辺のボランティアに参加しています。学校では、机のネジを交換したり、机の表面にニスをぬったりしました。

でも、このボランティアは、自分から始めたわけではありません。発案した先生と、私を誘ってくれた友達がいいます。

私に加わっても、最初は三人程度だったボランティアも、同じ部活の人を誘ってみると、翌日には六人に増えていました。人数が増えた分、作業も早く終わるようになりました。

でも、その時の私は、友達と一緒に、楽しいからという理由でボランティアをしていました。

ある日、仕事から帰ってきた父に、なぜボランティアをするのかときいてみました。父のしている震災のボランティアには、父の親しい友達がいるわけ

ではありません。すると父は、「早く被災地が復興できるように、一人でも多くの人が、力を貸して、みんなで協力して、復興させないといけないから。」と答えたのです。

その頃から、ボランティアが何のためにあるのかを考えてみるようになりました。

友達と楽しむのではなく、自分の得になることを考えるのでもなく、人のために何かしたいという自分の意志を持つてするのがボランティアです。

私は、そこまでボランティアの経験があるわけではなく、私がしているボランティアは、時間さえあれば誰でもできるものかもしれません。

だけど、私のしているようなボランティアでも、人の役に立っているのだということ、春休みに知ることができました。

春休みは、冬休みよりも人数が増えて、先生方も何人がおられました。そのボランティアが終わった時に、先生方からお礼

を言われました。こんな小さなボランティアでも、感謝してくれる人がいて、人のためになっているんだということが、よくわかりました。

ボランティアをしようという人が増えた時、ボランティアが終わって、感謝の言葉をかけられた時、大きな達成感がわき、ボランティアをして良かったなという嬉しさがこみ上げてきました。ボランティアをしたことで、学校がきれいになり、過ごしやすくなりました。そして、これからも続けていきたいと思いました。人のためにボランティアをして、私と同じように、この達成感や嬉しさを感ずる人が増えていったらいいと思います。そして、最初に私を誘った友達や先生のように、今度は私が、誰かを誘ってみたいと思います。

皆さんも、ボランティアとしての大きなものでなくても、人のためにできる何か小さなことをしてみませんか。

足を痛めて考えたこと

出雲市立長浜小学校 六年 澤 江 千 裕

夏休みが始まった最初の日、柔道の試合中に足を痛めてしまいました。「これくらい大丈夫ではない。」と最初は思っていました。ところが、病院に行ってみると自分が思っていたよりひどかったみたいで、そえ木をして、さらに松葉づえをつくことになってしまいました。

このけがのため、楽しみにしていた夏休みの行事がほとんどできなくなってしまいました。一か月くらい前から練習していた水泳大会も、申し込んでいたキャンプ、その他に普段なら何でもないと思っていたことができなくなってしまうました。でもその代わりに僕はいろいろなことに気付くことができました。

ジョ体操で普段なら五分で行けるところを松葉づえで行ったら二十分かかりました。しかも手には一日で片方の手に二センチ、もう片方の手に一センチの豆ができ、片足で体重を支えるためよい方の足まで筋肉痛になりました。

また、買い物をする時に松葉づえで歩くと普段なら何気なく通り抜けられるところも、思ったより松葉づえで歩くと横幅をとり、近くを歩く人の足にぶつかりそうになりました。お店の駐車場では地面が凸凹している、ぐらつとして怖い思いをしました。次からは身障者用の駐車場に車を停めさせてもらいました。

けがをして悪いことばかりではありませんでした。僕が良かったと思えたことは、普段なら考えなかった人の立場を考え

ることができたことです。足が使えないと不便で、ほとんどの場所に行くことができないと分かりました。今まで元気でいることが当然でけがをすることなんてあまりなかったもので、予定外のこと起きた人の気持ちなんて考えてもみませんでした。例えばオリンピックがありました。「メダル確実」と言われていた人が負けてしまったことがありました。調子がいいのが当たり前だと観客の人たちは期待していて、不調で思うような結果が出ないと選手は泣きながら「皆さんに応援してもらったのにすいません。」と謝っておられました。その人は生活のすべてをオリンピックのために費やしてきて、それでも思うような結果が出ず、テレビで少ししか見てない人に対しても謝っておられました。自分自身が一番悔しい気持ちだったのではないかと思いません。

柔道の試合で関節技をきめられて、それでも逃げてとても痛

いだろうに試合を続け、さらに腕を痛めてもなお勝ち進んでいる選手がおられました。すごい精神力だなと思います。とてもまねできません。こんなにまでがんばっておられるのに、競い合った結果負けた選手に対して、気持ちが弱いなどと言われたりします。そして、ものすごくがんばっておられたのに、周りの人にすいませんでしたと謝らなければならぬのはどうなのかなと思います。

僕は、もっと相手の立場を考えるということがとても大切ではないかと感じています。体の不自由な人の立場はもちろん、様々な場所ががんばっている人の気持ちも考えていくということが僕たちの社会には必要ではないかと思えます。そうすることでお互いに気持ちを分かり合い、よりよく生きていけるのではないかと思いません。

